

迷子の警察音楽隊

2007(平成19)年12月11日鑑賞〈角川映画試写室〉

★★★★



監督・脚本＝エラン・コリリン／出演＝サッソン・ガーベイ／ロニ・エルカベッツ／カリファ・ナトゥール／サーレフ・バクリ／イマド・ジャバリン／ターラク・コプティ／ヒシャム・コウリー／フランソワ・ケル／エヤド・シェティ／シュロミ・アヴラハム／ルビ・モスコヴィッチ／ヒラ・サージョン・フィッシャー／ウリ・ガブリエル／アフヴァ・ケレン（日活配給／2007年イスラエル、フランス合作映画／87分）

……エジプトとイスラエルは犬猿の仲。私はそう理解していたし、過去の歴史もそのとおり。しかし、今イスラエル期待の新鋭エラン・コリリン監督のこの映画によって、そんな国同士の確執は氷解……？ そう思わせるほどの影響を与えた静かなこの映画は、カンヌでも東京でも絶賛！ さあ、あなたはこの映画から何を学ぶ……？

この映画が、各賞を総ナメ！

2007年10月20日～28日に開催された第20回東京国際映画祭で見事、最優秀作品賞「東京サクラグランプリ」を受賞したのが、エジプトから旧敵国イスラエルにやってきた8名のアレキサンドリア警察音楽隊の姿を描いたシンプルなこの映画。のみならず、『迷子の警察音楽隊』は、2007年カンヌ国際映画祭の「ある視点」部門で国際批評家連盟賞、ジュネス賞、そして本作のために映画祭が特別に設けた「一日惚れ」賞の3冠に輝くなど、各国で絶賛され、受賞総計24冠とのこと。

さて、この映画のどこが、そんなに審査員たちに受けたのだろうか……？

興味深い団長の人物像は……？

イスラエル期待の新鋭エラン・コリリン監督が紡ぐこの映画は、揃いの水色の制服をきちんと着た総勢8名のアレキサンドリア警察音楽隊を映し出す静かなシーンからスタートする。そこで目立つのは団長トゥフイーク（サッソン・ガーベイ）の姿。彼には、エジプトを代表してイスラエルに入国し、新しくできたアラブ文化センターで

の演奏を国家的任務としてやり遂げなければならないという義務感がありありと読みとれる。ところが、空港に降り立った彼らを迎えにくる者は誰もいない。これは一体なぜ……？ 俺たちはどこへ、どうやって行けばいいの……？ そのうえ、俺たちはエジプト語はしゃべるものの、英語は「a little」しかしゃべれないのに……。

副団長として長年トゥフイークを支えてきたシモン（カリファ・ナトゥール）は、エジプト大使館に連絡して応援を頼もうとアドバイスしたが、今日まで誰にも頼らず音楽隊を率いてきた誇り高き団長トゥフイークはそんな助言を拒否。あくまで自力でアラブ文化センターを目指すと言明し、行動に移したが……。

エラン・コリリン監督が描く人物像として興味深いのは、第1にこの堅物団長のトゥフイーク。ストーリー展開の中、彼のそれまでの人生と苦悩そして今彼がどんな思いを抱いて生きているかが、徐々に明らかにされるから、それに注目！

対する、自由奔放な女性ディナの人物像は……？

迷子になって困惑する8名の音楽隊を受けとめたのが、ホテルすらない辺境のまち〈ベイト・ティクバ〉で食堂を営んでいる女主人のディナ（ロニ・エルカベツ）。えらくぶっきらぼうなモノの言い方だが、迷子になったうえ腹を空かして困っているというトゥフイークの話聞いて、彼女が、イスラエルの紙幣を少ししかもっていない彼らの食事を用意してくれたのにはビックリ！ そのうえ、食堂と自分の家とディナの店の常連客の男イツク（ルビ・モスコヴィッチ）の家を提供して8名の団員を分宿させてあげるときたから、まさに感謝感激！ ディナが8名の音楽隊員に対しそこまで好意を示したのは、女と見れば口説きにかかるカッコいい若者カーレド（サーレフ・バクリ）ではなく、人生経験豊かな団長トゥフイークに興味を示したためらしい……？ 夫と離婚しこんな田舎町でひとりで暮らしているディナが、寂しいっばいで何らかの刺激を求めていたことはまちがいない。さて、そんなディナの秘かな期待にあの初老の団長は応えられるのだろうか……？

女に目のない若手団員カーレドの人物像は……？

そもそも、団員を本来の目的地〈ベタハ・ティクバ（希望を開く）〉ではなく、この〈ベイト・ティクバ（希望の家）〉に向かわせたのは、団長の指示を受けて目的地の確認をしたカーレドの大チョンボ。つまり、ベイトとベタハをまちがえたせいらし

い……？ それはある意味仕方ないのだが、団長が許せないのは、カーレドがそんないい加減な情報を集めたのは、職務よりも案内所にいた美女(?)に言い寄る方に心を奪われていたこと。つまり、カーレドは女と見ればみさかしく口説くという典型的なプレイボーイなのだ。もっとも、プレイボーイが必ずしも悪いわけではない。なぜなら、カーレドはディナの家で宿泊した夜、スケートリンクでぎこちないデートをしている地元の若者パピ(シュロミ・アヴラハム)に対して適切なアドバイスをしてやることによって、女の子とのキスを成功させてやったのだから……。

こんなカーレドが団長と犬猿の仲なのは当然だが、エラン・コリリン監督はそんな確執すらも最後には氷解させることに成功。エラン・コリリン監督の人間を見る目の正確さには恐れ入るばかりだ。

ちょっと悩ましいシーンも……

食事のみならず一夜の宿までも提供されたトゥフイーグは、ディナに感謝の気持ちでいっぱい。他方、夫と離婚した後、まちの若者と不倫しているらしい(?)ディナの方は、どうもトゥフイーグに対してちょっと悩ましい気持ちをもっていたよう……？ だって、食事終了後まちを案内するという口実でトゥフイーグを誘うディナの心がウキウキしていることは、赤いワンピースにドレスアップしている姿を見れば明らか。

さてそこで問題は、ディナとトゥフイーグ団長との間に何ゴトかが起きるのかどうかということ。さて、あなたはどちらに賭ける……？

別れのシーンにも注目！

この映画は全体に静かで抑えた演出を貫いているが、それはトゥフイーグ団長のパーソナリティを尊重したため。そしてそれは、別れのシーンでも十分に発揮されている。一夜の宿を提供され、一夜のうちにディナ家宿泊グループとイツイク家宿泊グループはそれぞれに思い出深い一夜を過ごしたが、総勢8名の団員は翌朝ディナやイツイク、パピと別れを告げて本来の目的地に向かうことに。そこで、ちょっとぎこちない会話や遠慮がちなくささが、これまた面白い。すなわち、前夜はトゥフイーグとディナも、シモンとイツイクも、そしてカーレドとパピも、それぞれの本性をさらけ出しながら本音の会話を交わしたが、今朝はやはりオフィシャルな場。したがって、そこでは個人的な感情を表現することが憚られるのは当然。そんな中、トゥフイーグ



団長がさりげなくそしてぎこちなく、少しだけ右手をあげてバイバイするシーンは映画史上に残る名シーン。是非このシーンに注目してもらいたいものだ。

ペタハ・ティクバでの演奏は……？

エジプトとイスラエルは長年血で血を洗う抗争を続け、長い間犬猿の仲だった。したがって、エジプトを代表してイスラエルのアラブ文化センターで演奏する8名の音楽隊の決意と不安は相当だったはず。だって、数年前の敵国に乗り込んで演奏するわけだから。しかし、今ペタハ・ティクバにたどり着き、アラブ文化センターで演奏する8名の団員の顔は晴れやかですばらしいもの。だって、昨夜のバイト・ティクバのまちにおける「エジプトとイスラエルの交流」によってすべての問題点は氷解し、同じ人間同士なのだというを確認したところだから。そこで指揮をするトゥフウィーク団長をはじめ、イツイクの家での語らいの中でフルート協奏曲のイメージがやっと完成した副団長のシモン、そしてバイオリンを演奏するカーレドたちの晴れ晴れしくも誇らしげな表情はまさに絶品！

こんなすばらしいエジプトのアレキサンドリア警察音楽隊の演奏をイスラエルの人たちが率直に受け入れることができれば、未来永劫エジプト vs. イスラエルの対立はなくなるはずだ、と私は思うのだが……。

2007(平成19)年12月13日記